

いしだたみ

もくじ

- ◎館長室から……………P2
- ◎長崎ゆかりの文学……………P3
- ◎おすすめの本
「物理学関連の本」……………P4
- ◎おすすめの本2
「鎖国時代の通訳者たち」…P5
- ◎「協力車」の1日……………P6

No.196
2024年9月

表紙イラスト 西平あかね



館長室から

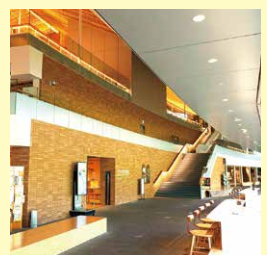
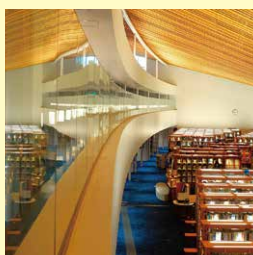
長崎県立長崎図書館長 池田 浩

開・閉館時にはできるだけ正面玄関でお出迎えし、お見送りすることになっている。毎日繰り返していると、その日の図書館の動きが感じられたり、素敵な出会いが訪れたりする。多くの学びも添えて。

借りていた本を抱えスキップをしながら玄関をくぐってくる子、一冊の本を胸に抱え大切に笑顔で図書館を後にする子。この子が自宅で登場人物と語り合っている姿やその本の中で自由に動き回っている様子を想像するだけで、いつも温かい気持ちに包まれる。幼児期・学齢期の子供たちにとって、一冊の本が、大切な言葉との出会いや様々な生き方や考え方に触れさせ、そこで生きる術を学ぶ機会になったりもする。翻ってみると、私たちもそうして本と出会い、学び、本を友として生きてきたのではないか。

来館者が返却棚に立ち止まり書棚を眺められている光景によく出会う。他の利用者の読書の興味をながめるとともに、自分が経験したことのない新しい分野、世界に触れてみたいと思う欲求が高まる場となっているのかもしれない。図書館利用の楽しみの一つでもある。未知の本は異なる世界、新しい視点、知識との出会いに誘う。

今、紙の本をめぐる様々な動きが報じられている。生成AIに象徴される高度なデジタル技術等によって簡単に多くの情報が手に入り、また、電子書籍等を媒体とした新しい読書の動きも加速している。町の書店の厳しさはこうした動きからもうかがえる。私たちがこれから生きていく社会にとって、生成AIに象徴される高度な情報化の進展は欠くことができない。また、グローバル化の波は、私たちの生活や経済活動等に激しい勢いで変化を求めてくるだろう。しかし、だからこそ、次代を生き抜いていくために、ただ情報や変化に流されるのではなく、自分の頭で考え行動につなげる力、異なる文化や価値観等も受け入れ、多くの人々とつながり協働できる力を蓄えていく必要があるのではないか。様々な価値が包含された多くの書籍に触れる、流れる文字ではなく止まった言葉を味わい深める力を磨く読書は、多くの視点を私たちに与え、人と人がつながり合う基盤を育む力になる、と思っている。次代を生き抜く力は、世代に関わりなく私たち自身が自らの力で身に付けていくしかない。ぜひ図書館を利用していただきたい。





長崎ゆかりの文学

～県立長崎図書館に残る文学者の足跡～

第1回
新村出と長崎

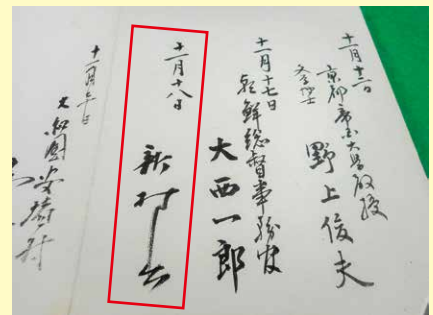
長崎国際大学非常勤講師
(元県立長崎図書館指導主事)

中島 恵美子

インターネットによる検索ができない時代において、『広辞苑』（昭和30年・岩波書店刊）は調べ物の第一歩と言うべき書籍で、平成30年に第七版が出版されたロングセラーです。この『広辞苑』の編者が新村出しんむらいずるです。新村出も長崎に足跡を残しています。

新村出は、明治9年山口県生まれ。東京帝国大学卒業。明治40年、京都帝国大学助教授となり欧州に留学。その後、同大教授となり、昭和42年に90歳で亡くなるまで京都で暮らしました。文化勲章も受章しています。雅号は「重山」ちようざん。旧居には「新村出記念財団重山文庫」があり、遺稿等の貴重資料が保管され一般公開されています。

新村出が長崎を初めて訪れたのは明治40年、欧州留学への旅の途中でした。歌集『重山集』にはその時の短歌が残されています。大正12年の来崎では、11月18日に県立長崎図書館芳名録の記帳があり、永山時英初代館長や長崎高等商業学校の武藤長蔵教授、実業家で郷土史家の永見徳太郎氏等と交流しています【写真1】。紀行文『南国巡礼』には、長崎へ向かう車中での気持ちを「ああ我が長崎だ、長崎だと胸がをどるばかりだ」と記しています。昭和2年には上海丸で長崎を訪れ、永山館長や武藤教授等と交友を深めました。



【写真1】新村出芳名録

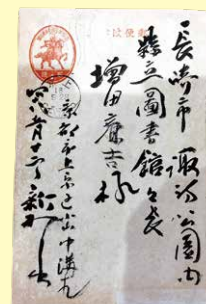
県立長崎図書館は、永見徳太郎氏から寄贈された2枚の新村出直筆色紙を所蔵しています。1枚は「崎陽懷古」きようかいこと題する短歌「阿蘭陀舟 もろこし舟の 玉の浦に 寄りて さかえし 古へおもほゆ」おらんだです【写真2】。「崎陽」は「長崎」けいほせんさいよじょうの異称です。もう1枚は「瓊浦戦災余情」と題する短歌「玉のうら たまと砕けず いにしへの すがたつたえて とはにあらなむ」です。



【写真2】新村出直筆色紙
「崎陽懷古」

増田廉吉第二代館長宛ての直筆葉書【写真3】もある一方、重山文庫には、永山・増田両館長や武藤教授、永見氏等からの書簡やはがきが所蔵されており、新村出と長崎の文化人との親交が偲べれます。

長崎市玉園町の聖福寺境内にある、歌人・吉井勇の歌を刻む「じゃがたらお春の碑」も新村の筆によるものです。新村出も長崎を愛し、その足跡を長崎に残した文学者なのです。



【写真3】新村出直筆はがき
増田廉吉宛(表)

【文学講座のお知らせ】

「長崎文学散歩！作家たちに愛された長崎」を開催します。

10月27日（日）14時～15時30分ミライon図書館多目的ホール（事前申込要・無料）

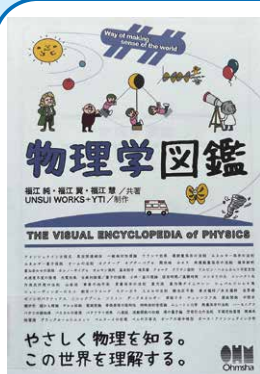
おすすめの本

物理学関連の本



皆さん、理科の授業にはどのような印象がありますか？近年、理科の学習に対する意欲は高まっているものの、過去に比べて学習の基盤となる自然体験や生活体験が乏しくなっているとされています。学校の授業以外ではなじみがない方もいるかもしれませんが、物理の学習で身に付けられる音や光、力などの知識は、特に実生活に直結しています。

ミライオン図書館は物理学に関する図書もたくさん所蔵しています。その中から4冊紹介します。

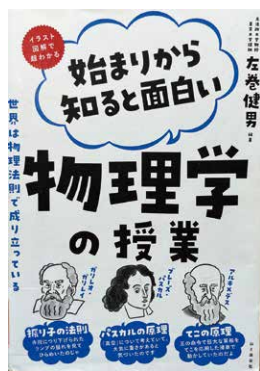


(2021年12月刊)

「物理学図鑑」

福江 純／共著
オーム社

相対性理論などの物理学の基礎となる考え方について図解している書籍です。難しい数式等を用いずにわかりやすく解説してあるので、物理学のおもしろさを感じていただくには最適の一冊です。



(2020年12月刊)

「始まりから知ると面白い物理学の授業」

左巻 健男／編著
山と溪谷社

万有引力をはじめ50の物理法則・原理を、イラストや数式を用いて解説している書籍です。科学者がどのように法則を発見したのか、法則や原理が身近な生活の中でどのように役立っているのか、楽しく学ぶことができます。物理に興味をもつきっかけとなるおすすめの書籍です。



(2008年6月刊)

「スピンはめぐる 新版」

朝永 振一郎／著
みすず書房

ノーベル物理学賞を受賞した朝永博士が、量子力学発展の歴史を解説した書籍です。実験結果や数式を用いて時系列に沿って解説されており、多くの研究者が量子力学理論を作り上げた苦勞を感じられます。

ちなみに…

朝永博士の父親は長崎出身の哲学者、朝永三十郎博士です。



(1976年刊)

「目に見えないもの」

湯川 秀樹／著
講談社（講談社学術文庫）

日本で初めてノーベル賞に輝いた湯川博士が、自身の物理観をわかりやすく解説した書籍です。戦後まもなく出版された原本から今日の文庫本まで増刷を重ねられており、科学を志す多くの人の心に影響を与えています。

ちなみに…

大村出身の長岡半太郎博士は教え子の湯川博士の研究を早くから評価し、ノーベル委員会に推薦しました。

こちらの2冊は、ミライオンの電子書籍でも読むことができます！

右のQRコードから利用登録のうえ、お手持ちのスマートフォンやタブレットでぜひ電子書籍をご利用ください。



おすすめの本 2

鎖国時代の通訳者たち



1853年、浦賀に現れた黒船4隻はアメリカ海軍司令長官ペリー率いる軍艦でした。

泰平の世を揺るがす大事件として有名な出来事ですが、鎖国していた時代、日本語を解するはずのないアメリカ人と日本人がどうやって意思疎通を図ったのか不思議に思ったことはありませんか？

そこには英語を理解する日本人通訳がいたのです。

江戸時代を通じて、長崎には交易をおこなっている中国やオランダの言語を理解し、通訳を生業とする人たちがいました。19世紀以降には、ロシア語や英語、フランス語の通訳も登場します。

通常、中国語の通訳を“^{つうじ}通事”、オランダ語の通訳を“^{つうじ}通詞”と表記します。

しかし、彼らを単なる通訳と思ったら大間違いです。

交易業務のための通訳・翻訳だけではなく、外交官的な役割や最新の西洋科学技術に触れ優れた科学者や語学者となる者もいました。通詞出身者で幕末維新の激動期に重要な役割を果たした者も少なくありません。

★通事・通詞についてもっと知りたい人はこんな本を読んでみよう！

【初級編】

「とつくとんとうか〔1〕」

－幕末通訳 森山栄之助－

川合 円／著 講談社

ペリーの再来日時に通訳を勤めた森山栄之助を主人公とした漫画。通詞がどんな仕事をしていたのかわかる1冊です。現在3巻まで発売中。



「海の祭礼」

吉村 昭／著 文芸文庫

鎖国中の日本でアメリカ人青年ラナルド・マクドナルドから本物の英語を学んだ通詞・森山栄之助を主人公とした小説。

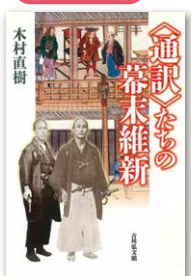
開国に至る幕末の日本を描きだす長編歴史小説。

【中級編】

く「通訳」たちの幕末維新

木村 直樹／著 吉川弘文館

もはやオランダ語だけでは通用しない。幕末のオランダ通詞たちが苦悩しながらも激動の時代を語学力で生き抜いた姿を追います。



「阿蘭陀通詞」

片桐 一男／著 講談社

江戸時代にあって、唯一の西洋世界との窓口となった、長崎・出島。

鎖国した日本で異文化交流を支えた才人たちの苦闘を描きます。

【上級編】

「長崎唐通事」

林 陸朗／著 長崎文献社

江戸時代唯一の開港場であった長崎を舞台に、対中国交流の最前線で唐通事として活躍した中国渡来の人々。その中の一家・林家にスポットをあてた1冊。



「開国と英和辞書」

－評伝・堀達之助

堀 孝彦／著 港の人

ペリーの黒船来航時に英語の通訳として活躍、さらに日本初の本格的な英和辞書を誕生させた蘭・英通詞の堀達之助。彼の人生を丁寧に辿りながら、壮大なスケールで日本の近代の意味をも問いかけます。

☆他にも通事・通詞に関するこんな本あります

『黒船』吉村昭／著 中央公論社、『阿蘭陀通詞の研究』片桐一男／著 吉川弘文館、

『ラナルド・マクドナルド』今西佑子／著 文芸社、『唐通事家系論攷』宮田 安／著 長崎文献社

「協力車」の1日

長崎県立長崎図書館では、「協力車」という専用の車で県内市町立図書館や大学図書館などを巡回し、貸出および返却本の配送や情報交換等を行っています。そんな「協力車」の1日をご紹介します！

①9:30

配送する資料等を
コンテナにまとめて、
車に積みます。



②10:00頃

ミライon図書館を出発！



〈協力車の巡回コース〉

- ◇ 県央コース（長崎市立図書館ほか）
- ◇ 県北コース（佐世保市立図書館ほか）
- ◇ 長崎コース（長崎大学附属図書館ほか）
- ◇ 島原・諫早コース（諫早市立諫早図書館ほか）
- ◇ 南島原コース（島原図書館ほか）

各コースを2週間に1回、巡回しています。
月に1回は職員が同乗し、情報交換等を行っています。

協力車は県内の端々まで巡回しています。



平戸大橋（平戸市）



大三東駅（島原市）

④17:30頃

ミライon図書館に
帰着し、各図書館から
持ち帰った資料等を
仕分けします。



③各図書館を巡回し、
資料の受け渡しや
情報交換を行います。



⑤巡回終了後は、情報交換等の内容を職員間で
共有しています。

最寄りの図書館に所蔵がない本は、県内市町立図書館からのお取り寄せができますので、お気軽にお尋ねください。

編集・発行 長崎県立長崎図書館

長崎県大村市東本町481番地

ISSN1344-5235

長崎県長崎市立山1丁目1番地51号